

貧困問題に関わる社会福祉従事者の実践力向上研修

東海地域ホームレス・生活保護研究会

〒470-3233 愛知県知多郡美浜町奥田 日本福祉大学社会福祉学部 山田壮志郎研究室内

助成事業の概要

本事業の目的は、貧困問題が深刻化する中、福祉事務所ケースワーカーをはじめとする貧困領域の社会福祉実践者の実践力向上が喫緊の課題となっていることに鑑み、当研究会の10年間のあゆみが果たしてきた役割を再確認するとともに、非会員も含めた貧困領域に関わる社会福祉実践者の実践力向上に貢献することであった。

具体的には、2011年12月3日に、「貧困と向き合う社会福祉実践」と題する10周年記念シンポジウムを開催した。シンポジウムでは、まず、埼玉県行政職員として活躍する社会福祉士の大山典宏氏が「貧困と関わる社会福祉実践の魅力」と題した講演を行い、今日における貧困問題の状況や生活保護受給者の自立支援に関する埼玉県の取り組み（アスポート事業）について紹介があった。次に、東海地域のソーシャルワーカー（生活保護ケースワーカー2名、ホームレス巡回相談員1名）によるパネルディスカッションを行い、それぞれ実践報告と実践の中での苦労ややりがいについて語っていただいた。

最後に、シンポジウムの内容や、会員有志が10年を振り返ったエッセイなどを収録した報告書をまとめた。

事業の成果

シンポジウムには68名の参加者があった。当研究会の会員は30名程度で、欠席した会員も少なくなかったことからすると、会員以外の参加が

たいへん多かったことがうかがえる。その点では、非会員も含めたソーシャルワーカーの実践力向上に貢献するという本事業の目的が達成できたと考えられる。

参加者アンケートには28名から回答があった。シンポジウムの満足度を5段階評価で尋ねたところ、「とても満足」が19名、「まあまあ満足」が6名であった（無回答3名）。大山氏の講演については、「アスポートの実践のお話は新鮮で楽しく、自身の事業所での実践にも生かしていきたいと思います」（50-60代・女性・社会福祉施設所属）など、氏が語られた埼玉県での先進的な取り組みに感銘を受けたとの声が寄せられた。特に「自立支援として教育支援が貧困の連鎖を断ち切るためにとても大切だと思った」（50-60代・女性・福祉事務所所属）との声に見られるように、埼玉県における子どもを対象とした学習支援事業への反響が大きかった。以上のように、参加者の貧困問題の理解を促すことができたと考えられる。パネルディスカッションについては、「普段聞くことのないCWなどの行政の方のお話がきけてよかったです」（10-20代・男性・NPOボランティア所属）や、「様々な立場の人から色々な意見が聞けて良い経験となった」（10-20代・公務員）といった声にみられるように、自身とは異なる立場・領域のパネラーの話が参考になったとの感想が多かった。多様な立場のメンバーが参加していることは当研究会の特色であり、その持ち味が非会員の参加者とも共有できたと考える。

報告書の作成にあたっては、シンポジウムの内容だけでなく会員による10年の活動を振り返る

エッセイも収録した。それぞれがそれぞれの思いを持ちながら会に参加し続けていることが綴られ、今後の会の持続発展にとって貴重な財産が得られた。

■ 今後の展開

シンポジウムに寄せられた参加者のアンケートや報告書に収録した会員のエッセイを読み返して改めて確認できたことは、当研究会の特色が多様な立場のメンバーが参加している点にあることであつた。日常の業務で話し合う機会の少ない人たちとの率直な意見交流は、職場内の研修では得られない刺激を会員に与えていると感じられた。発足後 10 年にわたり蓄積してきた当研究会の役割を、次の 10 年、20 年に持続発展させていくことが今後の課題である。そのことを確認できたことは、本事業の最大の成果であつた。